

# 2020年度

## 入学試験問題

(中学第1回午前)

### 国語

#### 注意

- 1 開始の合図があるまで、問題にふれてはいけません。
- 2 問題は14ページ、解答用紙は1枚です。  
はじめに枚数をたしかめなさい。
- 3 <sup>えんぴつ</sup>鉛筆、消しゴム以外は使ってはいけません。
- 4 印刷がはっきりしないなど質問があったら、だまって手をあげなさい。
- 5 字数制限のある設問は、<sup>くとうてん</sup>句読点等をふくみます。
- 6 <sup>しゅうりょう</sup>終了の合図があったら、すぐに鉛筆をおき、先生の指示に従いなさい。

明法中学校



【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、一部を改変している。）

私は姉から医王山の話を聞いてからというものの、毎日うしろの磧へ出てはその山を眺め、山の様子を思い浮かべていた。庭へでた姉は山の奥の方にある池のことを考えている私の姿を見つけ、後ろから近づき脅かした。

「あの池についておもしろい話があるんだよ、お前知っているの、知っていちや話らないだろうから。」

姉はわざとそう私をじらして置いて、そばから離れようとはしました。

「知らないんだよ、話して下さい。」

「ほんとに知らない？」

姉はいつものくせで、私の右肩に手を置き、れいの杏の香のする草場にある木の根に踏み込みました。ちょうど春の初まりかけたところで、芽生えのなかで茜色をしたのや紫ぐんだのや、そういう雑草の萌ざしがまるで花のようにつん出て、あるものはかなり高く伸びていました。私は再度姉にせがむと、姉は、れいの雑草の頭をぽつんぽつんと抜きながら話しつづけました。

「いつかお話したときに、ほら薬草狩りと言ったでしょう、あれはずっと昔のことで、お城下の薬舗店が毎年春の終りになると、みんな隊を組んで、あの医王山へ登るんですよ。」

は、みんな揃って御馳走をこさえ、そして山神に供えるカガミ餅だとか供米だとか珍しい初実りの野菜とかを積

I お山開きのようなものなんだね。そんなとき

んで出かけるんです。ちょうど町を朝まだ暗いうちに発つて、長い五里の山道を駕に乗ってその麓まで行くんです。そこへ着くころは、もう夜が明けてしまつて、すぐ露につつまれた山の麓の家々が、やつと起きたばかりなんです。」

姉は、その医王山の麓というのは、戸室山にはさまれた小さい村であることを言添えながら、

「そのお山開きについて面白い話があるんです。城下の古い木葉屋で、丁字屋というのがあるでしょう。あそこの家も毎年お山詣りに行んだそうです——ある年の春、例年のようにみんな、あの大池のふちで、持つて行つた重箱を開いたり酒を飲んだりしているうちに、その一行にいた娘さんのお蝶が急に見えなくなつたのです。Ⅱ  
皆は大騒ぎをして捜してみたけれど、更にわからない。谿合いや雑林の奥などにもいない。Ⅲ その日も暮れたので、皆はその晩麓の村のお寺に泊つて、翌日も捜し廻つたのだが、何処にもそれらしい影すら見えなかつた。」  
姉は更に話し続けました。

— 1

「父親はある晩、更けてからそつと娘の室を窺つていたのです。露がやや木の葉の上に光るようなころになると、娘の室の障子が、すうとひとりでに開かれました。ふしぎなこともあるものだ、よく気をつけてみると、紛うかたもない娘が半身を障子のそとへあらわし、庭を覗いてみましたが、きゆうに音もなく庭へ下り立つたのです。しかも素足のままです。ああいうからだをして能く歩かれたものだと思える位でした。

ア はて、何をするのだろうかと思つてみると、その白い手が擬宝珠のかげへつつ込まれると、ふいに、その

陰草かげくさから一疋びきの赤蛙あかがえるが飛び出しました。

イそうすると、こんどは、あたりを見廻すとその手をすういと自分の口元へもって行きましたが、赤蛙はいつの間にか娘の口の中へ呑み込まれたのです。

ウすると娘の手は、その飛んだ跡へ跡へと趁おつて最後に押おえつけました。

エどうするのかと見ていると、こんどは擬宝珠あまじゆのかげへ跼おんで、すうと、蒼白あまじゆい、まるで麻あまのように晒さらされた手を伸のびました。

そのとき娘はまるでこれまでに見たことのないような凄まじい、眇すがめ目めのような微笑びしょうをもらして、うまそうにその赤蛙を呑み込んでしまったのです。それを見ていた父親はまるで身体中がしびれるような恐ろしい悪寒を感じました。娘がそういう恐ろしいことをしようなんて、一度も考えなかつただけに、その驚おどろきようも一層強かつたのでした。見ているうちに、ブルブル顫ふるえるような身体を一そう鎮しずめてながめているうち、娘は幾疋いくひきとなく赤蛙をつかまえると食べてしまったのです。そうして庭をあちこち歩きながら、草さえあると手で搔かきさぐつていました。その歩いているうちの陰気いんきな音と言うたら、ゴムの上でも歩くような、音のないような変な遠い音なんです。そういう十分程がすむと娘はまた音もなくすうと自分の居間いへ這はい入いってしまつたのです。そのとき何なんだか障子しょうじがぎわへ姿が消えるとき、父親の目には ※ がずるずる、湿しめっぽい暗い音をさせながら、すぐ、障子の中へきえてゆくのが、見えるともなく目にはいつたそうです。そのとき身体中に森しんとしたある不思議な寒さが、骨の髄ずいまで徹ととつてくるような気がしたそうです。しかもその最後に見た障子の内のかげはまるで鼠ねずみの尾のような細い、鋭すまじい影かげだつたそうです。

す。」

— 2 —

私はそのときあまりの不思議さに、よくそういう時に誰でもするように、姉の顔を唯凝視しつづけていました。<sup>①</sup>  
うらかななかげが、杏の梢をすべり、わたしどもの跼んでいる足もとへも、すらすらこぼれており、そのためなお一層青い芽生えがその色を冴えさせておりました。

— 3 —

「あとでわかるから黙って訊いてお出、それからその父親が毎晩のように、娘が庭へ出て蛙をたべるのを見たそうです。きまつて晩になると、こつそり室から脱け出すのだそうです——けれども何しろ自分の娘のことであり、そういうことをセケン<sup>B</sup>の人に話すわけに行かないんで、黙っていました。相滄らず娘の方ではそんな父親が監視していることなど知らないものですから一向おかまいなしで毎晩庭へ出るのだそうです。」

② ある時、父親は不意に考えついて、娘の部屋の庭へ向っている障子ぎわに、金気のある錆びた棒を引いて置いたのです。父親は心で考えたことがあるため、そう遣つてみて娘が何かに憑かれていたのか、それともれいの山中へ行つてから気が狂っているのか、そういうことを確かめるためにそうしたのでした。ところがその晩障子が開いたには開いたが、その金の棒のあるために、きゆうに部屋の中へ這入つて行つてしまつて、再たと出てこないんだそうです。なぜというに、金気のあるものは憑きものに嫌われるからです。その翌晩もそうやつて置いておきましたので、娘はやはり室のなかで、さらさら変な音を立てて歩いているような様子だったが、出てくる様子とてもなかつ

たのです。その翌晩も、そのまた翌々晩もその金の棒を引いておいたのです。——ところが反対に娘はこのごろになって以前よりずっと瘠せ、ずっと食べものを食べなくなつたのです。ある日、父親がそばへ行くと、父親の顔をしみじみ眺めていましたが、不意に、あの鉄の棒をとって下さい、そうでないとわたしは息苦しくて仕方がありません、お願いですから鉄の棒を取りのぞいて下さいと父親にたのみました。父親も、娘の正体は何んであるか分からないけれど、可愛想な気がしてその晩鉄の棒を取りのぞいてやりました。

すると、娘はいつものように静かではなく、きゆうに障子をあげると、庭へ飛び出し、それきりその晩から姿を見せませんでした。丁字屋では大騒ぎをして捜したけれども、どこにも娘らしいものがいませんでした。父親は、あまりの不思議さに、ぼんやりと一日考え込んでいました。——娘のいた部屋へ行つても別にかわりはありません。ただ娘のいたところよりも、れいの、青くさい匂いがなくなつていたのです。何気なくそのフトン<sup>C</sup>を引いて見ますと、小さい蛇が黒々と一匹、皿巻きをしていました。父親は驚いてそれを趁つたが、その蛇はふいに床から庭さきへ迂り出し、それきり何処へ行つたか見えなくなつたそうです。

が、ふしぎにそれから後も、いつも土蔵の日南や、屋根の上や、娘のいた居間のそばなどに、どこから出てくるのか、れいの、黒々とした一匹の蛇が、まるで影のように皿巻きをしていたそうです。それゆえ、みんなは何日となくその蛇を趁わなくなり、却つてその蛇にしたしみを持つようになりました。小さい胸紐のような蛇は、白い腹をし、わりあい、優しい目をしては丁字屋の人々をながめてはいました。父親は、ときどきその蛇を掌のひらの上に乗せ、じつと日南の温かいところで、何となく、寂しくその円い輪になつた蛇をながめておることなぞありました。もちろん、蛇は何んにもしません、蛇もこいしげに父親の掌の上で、その可哀らしい頭を持ち上げ、父親の

顔を上げしげ眺め込んでいたりしていました。」

姉はそう言い終えると、私はきゆうになす訊ねて見ました。

「では娘さんはどうしたのだろう、どこへ行ったのだろう。」

4

「それはね。」

姉は言葉を切ってから、

③「ほらあのお山へ行ったときから、きつと蛇\*につかれていたんですよ。それゆえ、ずっとさきに死んでいたのかも知れない——だから今でもあのお山には、そのお蝶さんのお墓が建っているそうだよ、その池のまわりにね。」  
私は、きゆうに、医王山の方をながめました。今日はくつきりした紫色に晴れあか上っていました。姉も同じように、山の方をながめました。私は不思議な話が頭のなかに生きているため、その医王山が一つの生きもののようになつて見えました。

(「不思議な国の話」室生犀星)

「注」

つかれる…不思議なものに人の心が乗り移られる。

問一 〓 線AとCのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〓 線aとcの漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問三 問題文からは次の文章が抜けている。文章を補うのに適切な場所を【 1 】〜【 4 】の中から選び、数字を書きなさい。

「その影はいつたい何んだろう、鼠の尾のようなものが……」  
私はおもわずそう問いかけると、姉は、わらって、

問四 I III に入る最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア とうとう      イ 更に      ウ つまり      エ 一方で      オ そのため

問五 ※ に入る最も適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 姉の影      イ 蛙を飲み込んだ蛇      ウ 細長いものの影      エ 医王山の影

問六 ——— 線①の時の気持ちとして最も適当なものを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戸室山を登った丁字屋の親子を襲<sup>おそ</sup>う不思議な出来事を知り、夏の朗らかな陽気とは裏腹の嫌<sup>いや</sup>な気持ち。

イ 医王山の池を訪れた丁字屋の娘とその父に起きた話を聞き、信じ難いと思いながらも、続きを聞いた  
いと思う気持ち。

ウ 医王山の池を訪れた丁字屋の娘とその父に起きた不思議な話を聞き、好奇心<sup>こうきしん</sup>の青い芽が芽吹<sup>めぶ</sup>き嬉<sup>うれ</sup>しい  
気持ち。

エ 医王山の山開きの不思議な習慣を聞き、得体の知れないものを見て寒気を感じ、不気味に思<sup>おも</sup>う気持ち。

問七

—— 線②とあるが、「父親」が「金気のある錆びた棒」を用いてこのようにした目的を説明しなさい。

問八



内のア、エの文を意味が通じるように並べかえ、記号で答えなさい。

問九

—— 線③とあるが、「姉」がそのように考えた理由として適当でないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「父親」が蛇を掌のひらの上に乗せ、何となく寂しく円い輪になった蛇を眺めているから。

イ 急に障子を開けて庭へ飛び出したきり、どれだけ探しても、娘が見つからないから。

ウ 白い腹をした「小さい蛇」は父親の顔を優しい目でしげしげ眺めこんでいたりしているから。

エ 娘の部屋の庭へ向かっている障子ぎわに金気のある棒を置くと娘が部屋から出てこないから。

オ 「娘」は「父親」が監視していることなど知らないで、毎晩庭へ出ているから。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、一部を改変している。)

\*  
自己啓発本けいはつ

の著者たちは、生活を変えるための行動を起こすにはモチベーションモチベーションを上げるしかないオウムのよ

うに繰り返してきました。そのため、今ではほとんど疑いを持たれることもなく、それが当たり前Aのテジテジュンジュンにな

っています。モチベーションモチベーションに関するウェブウェブサイトはあふれるほどあり、オオゼイBの人が「モチベーションで解決」

することを求めて、こうしたサイトにアクセスしています。何もしないよりはモチベーションモチベーションを上げるほうがまし

なことは私も認めますが、無敵の方法というものは存在しません。たとえば、運動をして望みどおりの効果を得ら

れたとしたら、その理由には3つの可能性が考えられます。モチベーション、意志の力、そして習慣です。すべての行動はモチベーションと意志の力がいくらかずつ組み合わせられて成り立ちますが、たいていはどちらかに重心が偏るものです。そして、なんとしてもそれをしなければという強い意志を持つ一方で、モチベーションを上げようとする奇妙な混合状態も存在します(戦いに敗れるのは、通常はこの状態のときです)。

① 行動するのにモチベーションが必要だと信じていることほど、危険な習慣はありません。モチベーションを上げたいと思うこと自体は問題ではないのですが、それがないと何もできないと考えるのは問題です。この考えが行き着く先は、怠け癖のサイクルでしかありません。怠け癖がつくと自分を怠け者だと思うため、いつも怠けたいと感じます。そして、モチベーションのルールに従っていると、そのままずっと怠けている状態が続きます。そこから抜け出すことはできません。

何をするにもまずモチベーションという考えが、その人の深層心理にキザみ込まれてしまうこともあります。しかし、感情と行動がつねに一致していなければならぬというルールはありません。それは、がんじがらめで不満だらけのライフスタイルをつくりだすだけです。

たとえば、あなたは毎日2時間の読書をするためにモチベーションを上げ、これを3週間続けられたとしましょう。この時点で、あなたの中にこの行動を習慣にするための小さな芽が育ち始めます。ところがあなたはモチベーションに頼っているために、ここから先に進むことなく、習慣は芽のまままで成長の終わりを迎えてしまうかもしれませぬ。「熱意減退の法則」は、私が考えた用語です。「限界効用遞減の法則」という経済原則よりはずっとわかりやすいのではないのでしょうか。この経済原則は、4枚目のピザを食べる楽しみは、3枚目のピザを食べる楽しみよ

りほんの少し薄れ、5枚目になると4枚目よりさらに薄れることを意味します。行動の繰り返しもこれと同じです。行動が習慣に変わり始めるころには、その行動への感情は薄れていきます。退屈たいくつでつまらなく思えてくるかもしれません。おそらくそうなるでしょう。心理学者のジェレミー・デインは、著書『良い習慣、悪い習慣』の中で、「習置的行動は無意識におこなわれるだけではない。感情から切り離されている。……習置的行動は不思議なほど無感情におこなわれる」と述べています。ウエンディ・ウッド教授のチームも、テキサスA&M大学で実施した研究で、被験者ひけんしやが習慣的な行動をするときには、明らかに感情的な反応が乏しいほとことに注目しました。これこそが、何をするにもまずモチベーションという考え方自体が、習慣づくりにおいては不利になる理由です。同じ行動の繰り返しで興奮aが高まることはなく、逆に薄れていきます。習慣化が進めば進むほど、それをする事への抵抗ていこうが少なくなり、どんどん自動的におこなうようになるからです。デインは、「強い感情を引き起こさないことが、習慣化の利点のひとつ」と言っています。これは本当です。

何かを始めるときに感じる興奮は、最初は私たちの頼たのもしい味方です。ところが、興奮が薄れると手強い敵ていに変わり、何かが間違まちがっているのでは、と感じさせるようになります。

しかし、このリスクを思い切り引き下げる方法はありません。最初からモチベーションと感情に頼らなければいけません。<sup>D</sup>

ムチュウになるのはすばらしいことですが、その気持ちの高まりは、行動開始の合図ではなく、あくまでもポーンとみなしておきましょう。それよりも、自分でそうすることを選んでという理由から何かをするほうが効果を

期待できます。そのほうが、ぐらつかない頑丈な基礎がんじょうきそになってくれるはずで、なんとなく矛盾むじゆんしているように感じられるかもしれませんが、しばらく時間が経たって熱意に欠けてくるのは、脳の中でその行動をコントロールするのが、**I** 反応をつかさどる大脳基底核かくに変わりつつある好ましい兆きざしだからなのです。

運動を始めた人が1カ月も経つと挫折さつせつしてしまうのは、この予想される”熱意の減退”も理由のひとつです。うまく続けられていた運動でさえ、どうもやる気になれないと思うと、やめてしまうことがあります。なぜ**II**が薄れてしまったかを理解すれば、きっと安心して続けられるはずで。

モチベーションに頼る方法は、あなたが毎日をどうにか暮らしていくには(おそらく)十分かもしれませんが、意志の力に比べると優よれた選択せんたくとはいえません。意志の力で行動するのがいちばんの方法なのですが、ほとんどの人はその使い方を知らず、意志の蓄たくわえをすぐに空っぽにしてしまいます。

ここまでずいぶん否定的なことを書いてきましたが、心配はいりません。あなたはそれでも日常生活を十分に楽しめます。いつも感情豊かな人間でいられるでしょう。私はあなたに**III**を持つなど言っているわけではありません。もう二度と、自分の行動に感情のブレーキをかけたりしないようお願いしているのです。

(「小さな習慣」 スティーヴン・ガイズ 田口未和訳)

〔注〕

自己啓発本：読者の能力の向上や精神的な成長を目指して書かれた本。

モチベーション：人が行動を起こすときの原因や動機、意欲のこと。

ウェブサイト：インターネット上にある情報の集合体のこと。  
リスク：・危険の生じる可能性や危険度のこと。

問一 〓 線 A ～ D のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〓 線 a ～ c の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問三 〓 I ～ III に入る最も適当な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 熱意    イ 感情的な    ウ 感情    エ 習慣    オ 自動的な

問四 〓 線①とあるが、筆者が危険であると考える理由として適当なものを二つ選び、記号で答えなさい。  
アモチベーションに頼らないことこそが、無敵の方法ではないモチベーションの向上に変わって、全てに当てはまる成功の秘訣ひけつだから。

イモチベーションが上がらないことを理由に、動かなくなる「怠け癖のサイクル」に陥おちいるから。  
ウたとえモチベーションがなくても、強い意志があればモチベーションを上げることができるから。  
エ強い意志で何かをしようとする一方で、モチベーションを上げようとする「奇妙な混合状態」が時には戦いに負ける原因になっているから。

オモチベーションに頼っていると、一度モチベーションを上げても回数を重ねると熱意は減退し、習慣の芽は成長せずに枯かれてしまうから。

問五 〓 線②について、次の問いに答えなさい。

(1) —— 線②について説明した次の文章の（ ）に入る言葉を指定された字数でそれぞれ本文から抜き出し、答えなさい。

何かを始めるときに感じる興奮をモチベーションの上昇じょうしょうとして（ア 七字）にするのではなく、あくまでも行動を開始したことの（イ 九字）、理由をもって行動に臨むこと。

(2) 筆者が —— 線②のように述べる理由として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 熱意が減退した後も、減退の理由を知っていることで安心して行動を継続できるから。

イ どうもやる気になれなくなったときに、理由をもって行動をやめることができるから。

ウ モチベーションに頼ることで、意思の蓄えを空っぽにすることなく行動を続けられるから。

エ 同じ行動の繰り返しで興奮が薄れても、習慣化した行動をやめることに抵抗を感じなくなるから。

問六 本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は自分を怠け者だと思うといつも怠けようとしてしまうので、習慣の芽を育てるためには自分を怠け者だと思わないことが重要である。

イ 行動が習慣に変わり始めるころはその行動へのモチベーションが向上するので、習慣の芽を育てるためにはこの時期をのがさないことが重要である。

ウ 習慣化とは、行動への感情が薄れ自動的にその行動をするようになることを指すので、何をするにもモチベーションが必要だという考えは習慣化には不利である。

エ 習慣化には、何かをするにはモチベーションが必要だという考え方は不利だが、習慣化した後には、感

情のブレーキをかけずに行動するにはむしろモチベーションが有利である。

オ何かを継続けいぞくに行う時には習慣化が有効だが、何事にも無敵の方法というものは存在しないため、場合によっては、習慣化以外の方法で行動をすることが有効なこともある。

問七 「私の習慣」という題で、解答らんのわく内に自由に作文しなさい。なお、題名は解答らんに書かないものとする。